

# 井上隆雄写真資料の利活用 アルチ寺三層堂壁画『般若波羅蜜仏母』模写について

Alchi Choskhor Gompa Sumtsek 1F『Prajnaparamita』

正垣雅子（京都市立芸術大学日本画研究室）



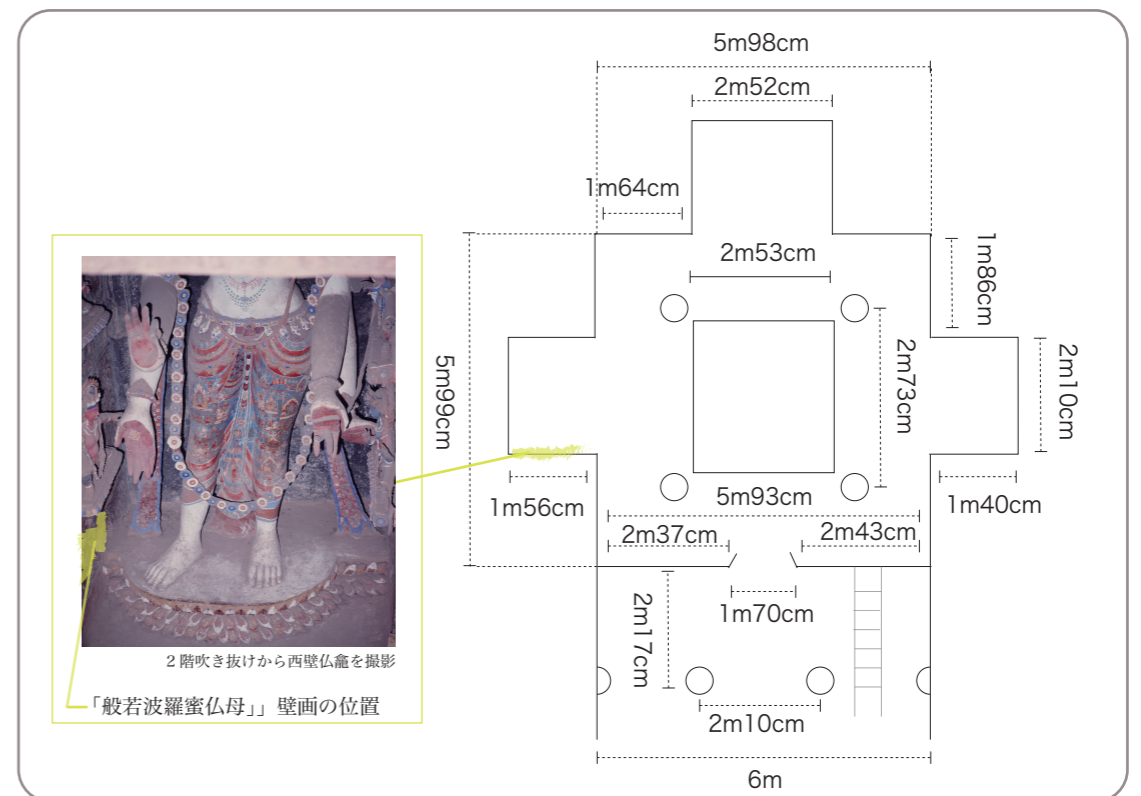
アルチ寺（Alchi Choskhor Gompa）は、ラダック地方で古様な建築様式と仏教壁画を備えた寺院として知られている。

吐蕃王国の衰退後、ラダックを含む、西チベットで仏教復興の機運が高まった。11世紀に大訳経官リンチェンサンポ（958-1055）が、カシミールから工人32名を連れて西チベット各地に寺院を創建したという伝記があり、西チベットの古刹には西方の影響を色濃く反映した宗教美術が認められる。しかし、カシミールのイスラム化が進行し、仏教の伝統が失われるにしたがって、ラダックの仏教美術は次第に中央チベットのものに普及するようになった。この時期の仏教美術の表現は限られた地域と時期に残され、チベット仏教美術のなかでも独創的である。精緻でありながら古拙で地域性のある表現が魅力である。アルチ寺の創建時期は、リンチェンサンポ創建の寺院群より少し遅れて11～12世紀と推定されているが、仏教復興の機運の高まりと文化流入の情熱と感性に基づいた建築と壁画が三層堂、大日堂に残されている。

アルチ寺三層堂には、三方向の壁に大きな仏龕が設けられ、巨大な塑像（観音菩薩・弥勒菩薩・文殊菩薩）が安置されている。塑像はその頭が一階の天井を超える高さがあり、礼拝者に圧倒的な存在感を示している。仏龕内は、左右の壁に蓮台上に坐す菩薩塑像が4体設置され、立体的で密度の高い空間となっている。三層堂の壁、天井は全てに隙間なく尊像、仏国土、供養者など仏教絵画で埋め尽くされている。

筆者の取材時、『般若波羅蜜仏母』はすぐには見出せなかった。それは、西壁仏龕内の観音菩薩塑像の右壁（南側壁）の下方に描かれていたためである。『般若波羅蜜仏母』のすぐ上は菩薩塑像坐す蓮台が飛び出しており、壁面は蓮台の影になってしまう。壁の塑像と観音菩薩塑像の間の狭い空間に、絵師は座り、絵筆を執ったであろう。当然、龕内は暗く、埃っぽい場所である。堂宇内は、礼拝者から見える見えない関係なく、描くことができる壁すべてに手を抜かず仏教を題材した絵画表現を施すという意識に満ちている。寺院造営は、大勢の人々が仏菩薩の御坐す空間を創造するという畏れと誉れを抱きながら、ひたむきな想いが蓄積される事業と言えるだろう。

今、私たちは現地へ赴かなくても、井上隆雄の写真で『般若波羅蜜仏母』を正面から具に観察することができる。この現場で撮影することの困難さは容易に想像つく。チベット仏教圏の寺院堂内は大抵暗い。その壁画に光を照射すると壁面の光沢や埃によって反射する。ラダックは標高3000mを超える高地で、空気が薄い。当時は、大きいフィルムカメラなので、持ち歩きや撮影動作には平地とは違う苦労がある。井上隆雄の写真技術の高さ、対象への眼差し、真摯な撮影姿勢を思い浮かべると仏菩薩の世界を無心に描く当時の絵師と同じ心を持ったと筆者には感じられる。



## 井上隆雄写真資料からの模写制作

筆者は現地取材を4回行った経験から寸法、色、壁画表現の特徴は知り得ていた。本アーカイブ実践研究において、井上隆雄撮影画像（ポジ/ブローニーサイズ）をデジタル化し、原寸大に調整し確認したところ、細部の表現や描写を解釈することができた。例えば、『般若波羅蜜仏母』の椀の模様が狩猟紋であること、条帛や幡の模様に表される文様が、インド西北部地方の毛織物を装飾する十字紋りの表現であることを読み解くことができた。

そして、日本画実技の立場から『般若波羅蜜仏母』壁画表現の手技の検討と再現を試みた。再現方法は、井上隆雄写真原寸大印刷をベースに、その上に薄い和紙を重ね置き、和紙を巻き上げながら観察と表現を繰り返すことにより「あげ写し」の方法を採用した。あげ写しは、資料の観察と忠実な再現に重点をおいた模写技法である。筆者自身の調査経験で得た感覚を生かしつつ、基本的には約半世紀前の井上隆雄写真に記録されている壁画『般若波羅蜜仏母』の姿を描き写すことを試みる。色材は、日本画で用いられる顔料のうち、現地でも共通するものを中心に、チベット文化圏のみで流通している色料を組み合わせる用いた。

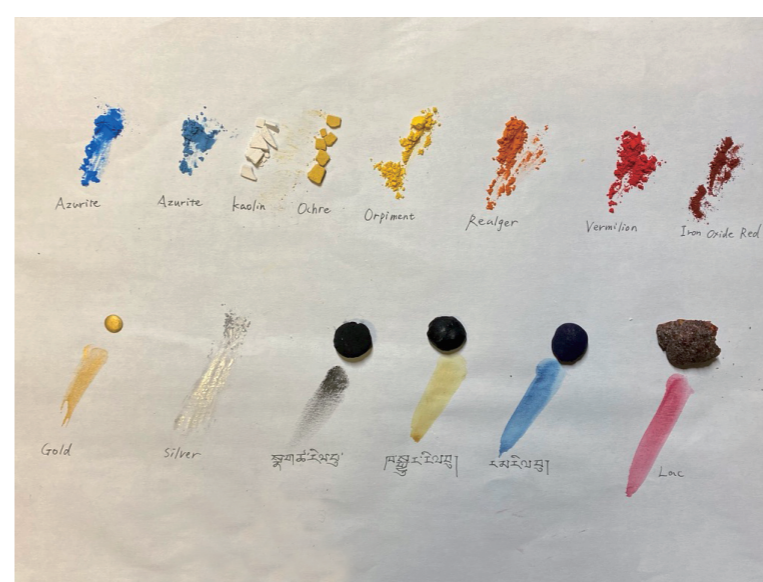


ラダック地方の帯（フェルト地に十字紋り）



あげ写しの模写制作の様子

模写を行うと、当時の制作の手順や色材について推察できる場合が多いがそれらの追体験に終始しないように心がけた。この壁画が内包している、時代を経てきた風韻を尊重した上で壁画表現を写し取る。ただし、壁画の風情や、絵画表現の障りになる損傷や劣化の痕跡の調整は適宜行う。このような立場で模写を行う理由は、当時の状況を詳細に記録した壁画写真があるので、表面的に正確な形を写し取る模写、素材材料を合わせただけの模写は自身の経験上も模写作品としても必要度が低いと考えられる。模写は単なる写しではない。写真、印刷に認められる色や線を、実物の色材と手技に翻訳した上で、



模写制作に用いた色材

原本にある表現技法と感性の再現に重点をおいたものが原本の魅力を持った模写になると考えている。

本研究では井上隆雄写真資料の利活用の一例として模写研究を行う機会を得た。模写を通して学んだことは多い。本研究が、多くの人にとってラダックの仏教美術の窓口になり、また多角的な研究に広がることを望まれる。